

この作品は18歳未満の方はご購入・ご閲覧頂けません。



Mokusa
Painting

Products
-Since 2003-

KEEP OUT! KEEP OUT! KEEP OUT!



あっぱい
増量中!!

ね と かあ
寝取られ母さん

—良妻賢母カトシアさんの肉欲生活—

Mokusa-Painting



Sexual Parody CG
series vol.100

カラン、カラン…

<http://mokusa-painting.net/>

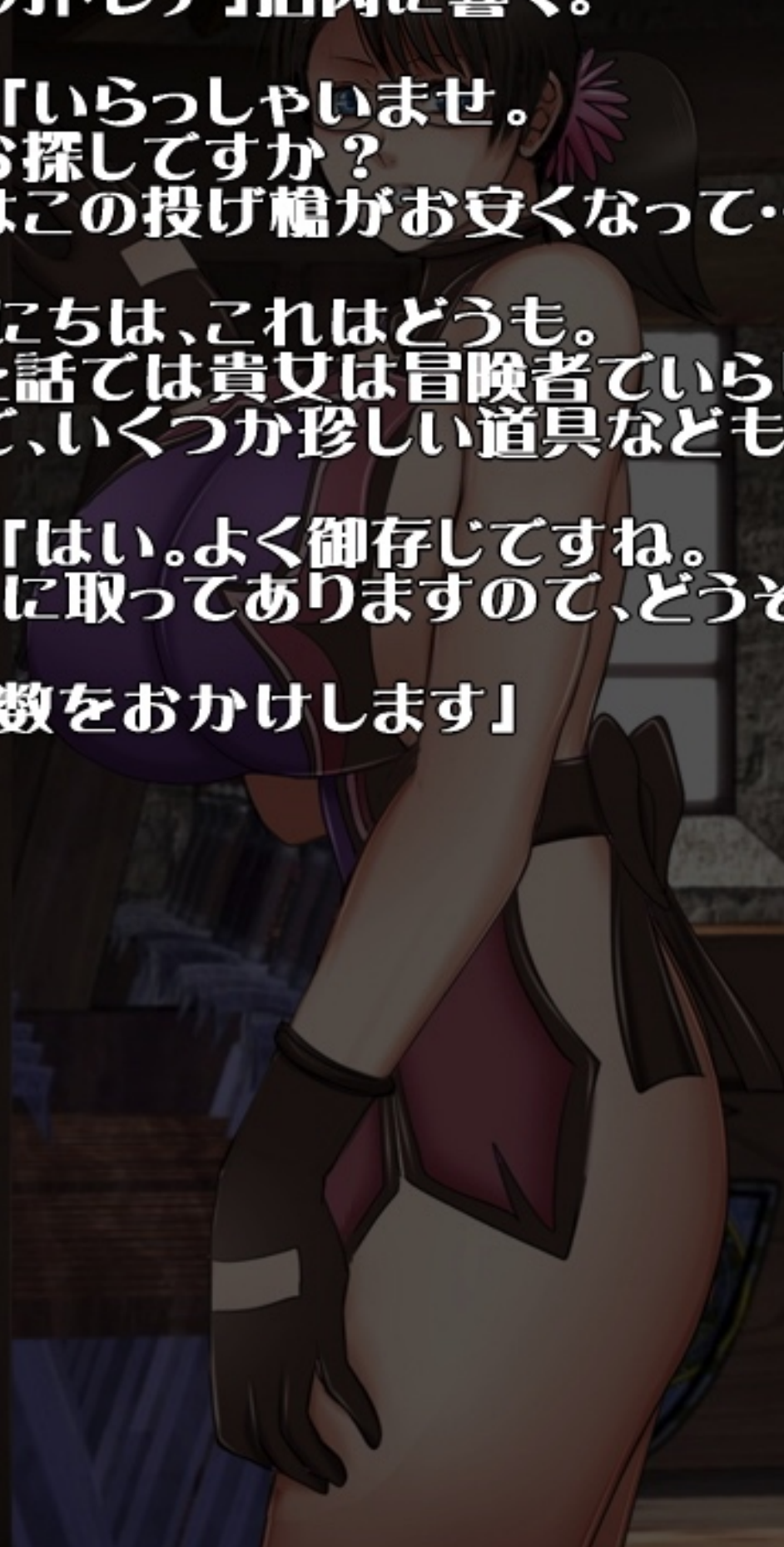
来客を知らせるチャイムが
「武器屋カトシア」店内に響く。

カトシア「いらっしゃいませ。
何をお探ですか？
今日はこの投げ槍がお安くなって…」

男「こんにちは、これはどうも。
聞いた話では貴女は冒険者ていらしたと。
そして、いくつか珍しい道具などもあるとか」

カトシア「はい。よく御存じてですね。
こちらに取っておりますので、どうぞ」

男「お手数をおかけします」





カトシア「えーっと…たしかこのあたりに…
すみません、道具をお求めの方は珍しいので、
もう少し奥の方にあるみたいです」

Mokusa-Painting
<http://mokusa-painting.net/>

男「いえ、いえ、大丈夫ですよ。私はこちらの武器など
拝見していますからどうぞごゆっくり」

数分後、カトシアは道具類の入った箱を持ってきた。

男「おおっ！『遙けき地の鱗』！！私はこれをずっと探して
いたのです。どうでしょう、他にも手に入りそうですか？」

カトシア「ええ、知り合いに頼めば、おそらく」

男「そうですね、では可能な限りお願いします。
私はファンブルと申す薬草使いでして、
仕事柄これらの貴重な道具類が必要なのです。
もちろん、言い値で引き取らせていただきますので」

カトシア「そういうわけだったんですね。
わかりました。それでは入荷次第お届けに上がります」

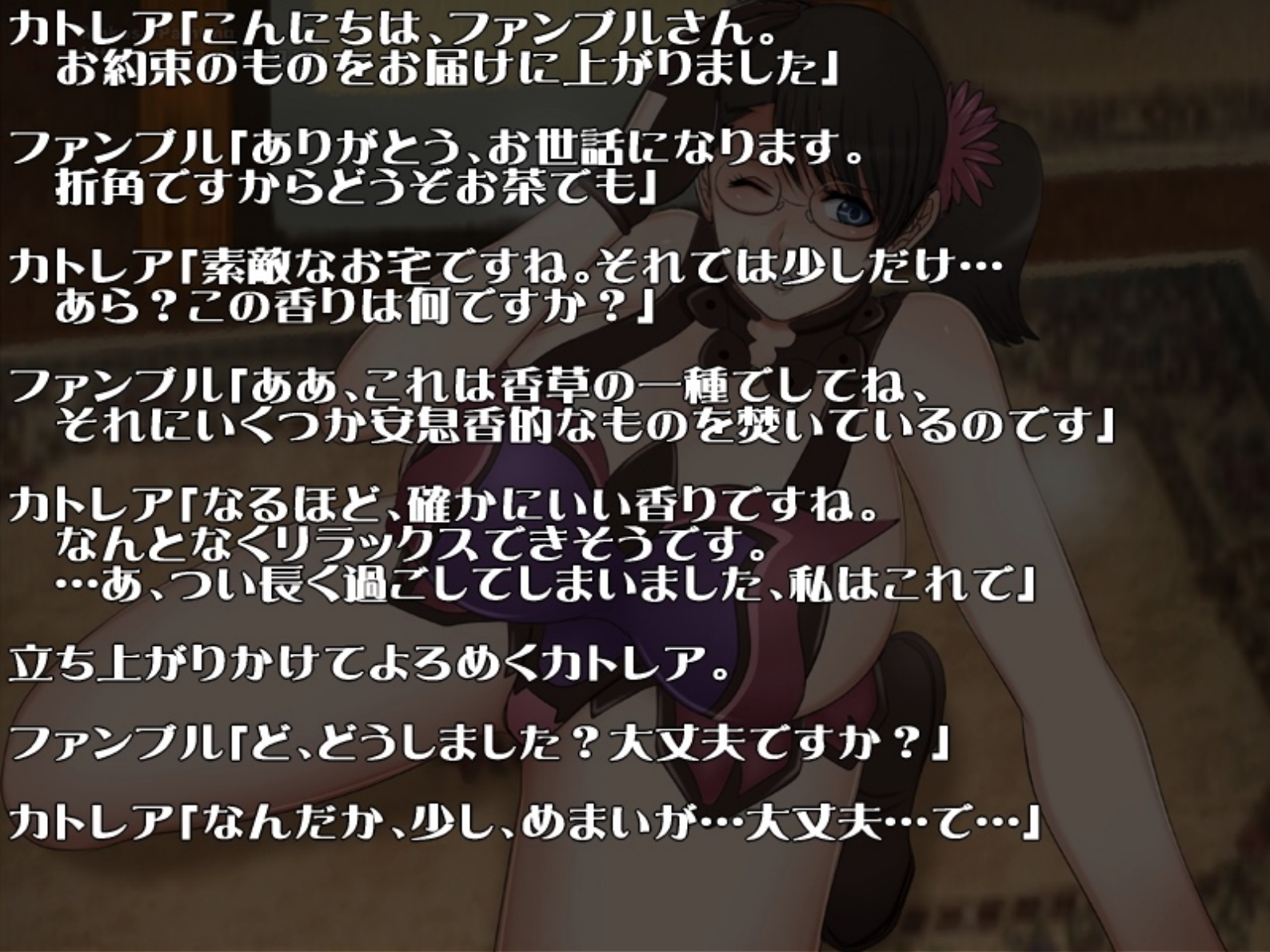
ファンブル「いえいえ、私が引き取りに伺いますよ」

カトリア「大丈夫ですわ。入荷は不定期になりますし、
お知らせに上がるのも同じことですから」

ファンブル「そうですか。申し訳ありません。
私の住所はこちらですので、よろしくお願いします」







カトシア「こんにちは、ファンブルさん。
お約束のものをお届けに上がりました」

ファンブル「ありがとうございます、お世話になります。
折角ですからどうぞお茶でも」

カトシア「素敵なお宅ですね。それでは少しだけ…
あら？この香りは何ですか？」

ファンブル「ああ、これは香草の一種でしてね、
それにいくつか安息香的なものを焚いているのです」

カトシア「なるほど、確かにいい香りですね。
なんとなくリラックスできそうです。
…あ、つい長く過ごしてしまいました、私はこれで」

立ち上がりかけてよろめくカトシア。

ファンブル「ど、どうしました？大丈夫ですか？」

カトシア「なんだか、少し、めまいが…大丈夫…で…」



ファンブル「カトシアさん？大丈夫ですか??」

すでに応答がなく、昏睡状態に近いカトシア。

ファンブル「うーん、さすが『遙けき地の鱗』。
ここまでの即効性とは思わなかったが…
まあ、全く耐性のない状態でこの処方では
たとえ熊でも失神するだろう」

ファンブルと名乗るこの男は
確かに薬草使いであり、
以前からカトシアに行き…
もとい好意を寄せていたのだった。

しかし正攻法ではなかなか難しいため、
一計を案じて接点を持ったのである。

ファンブル「見ているだけでもすごかったが…
おおっ！！こっちはきつくもいい具合だ！」

カトシア「うう…ん…」





しばらくして目を覚ますカトシア。

カトシア「あれ…？私は…？」

ファンブル「おお！良かった。お気づきてすね！
いきなり倒れ込まれたので心配していましたよ」

カトシア「こ、ごめんなさい。
どうも色々とご面倒をかけてしまったようで…」

ファンブル「いえいえ、気にしないでください。
香草類には体質に合わないものもありますから、
もしかするとそのせいかも知れません」

カトシア「なるほど…でも、確かによく効きますね…？
いま起きたばかりですが、なんだかいい気持ちで…。
普段は首肩のコリが酷いんですが、とても快適です」

ファンブル「それはよかった。
できるだけ効果があるような調合を工夫しますから、
よろしければまたお試してください」

カトシア「ええ、是非」



そして今日もまた、熟睡状態に入ったカトシア。
男の柔らかい物腰や
薬草類の効能などに惹かれて、
最近では品物を届ける以外にも
足しげく通うようになっていた。

そして、その度に男によって
好き放題されているのだが、そのことには
まったく気がつかないのであった。







そんなこんなで3か月ほど経過したある日のこと。

例によってカトシアは男の施術を受けていたのだが、徐々に耐性が出てきたのか、はたまた意図的なものか、真っ最中にカトシアが目を覚ましてしまったのだった。

カトシア「んん…っ…え、ええええっ!?!」

ファンブル「あうっ!」
どびゅっ!!

カトシア「なななな、なんて事を!!」

とても平穩には収まりそうにない状況ではあったが、平身低頭謝る男の口からは自分に好意を持っていたこと、また男もカトシア同様妻が失踪していることなど事情を聞くうちに多少気持ちも収まったのだが…とは言えやはり、とても許せることではない。

カトシア「残念ですが、これまでですね!!」

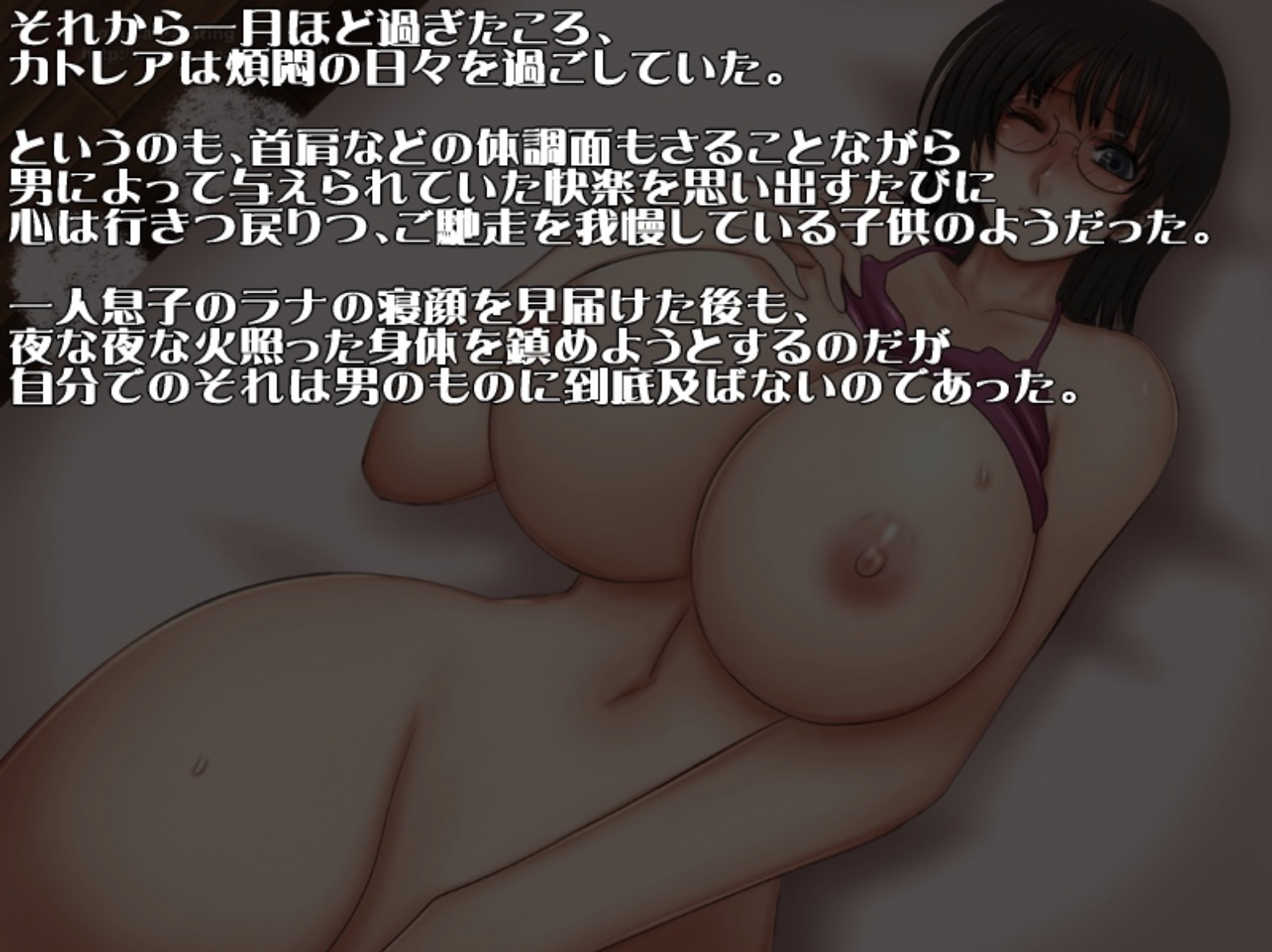




それから一月ほど過ぎたころ、
カトシアは煩悶の日々を過ごしていた。

というのも、首肩などの体調面もさることながら
男によって与えられていた快楽を思い出すたびに
心は行きつ戻りつ、ご馳走を我慢している子供のようにだった。

一人息子のラナの寝顔を見届けた後も、
夜な夜な火照った身体を鎮めようとするのだが
自分でそれは男のものに到底及ばないのであった。







そして後日、
ふたたびカトシアは男のもとを訪ねた。

男はこうなるだろうとは予測していたので、
また、眠りを浅くすることで、
より生々しい反応を楽しむためにも
徐々に薬の使用量を減らしていたのであった。

そして、その目的のために来ているが、
なかなか本題が切り出せないカトシアに対して
男はおもむろに一物をさらけ出すのであった。

カトシア「！！」



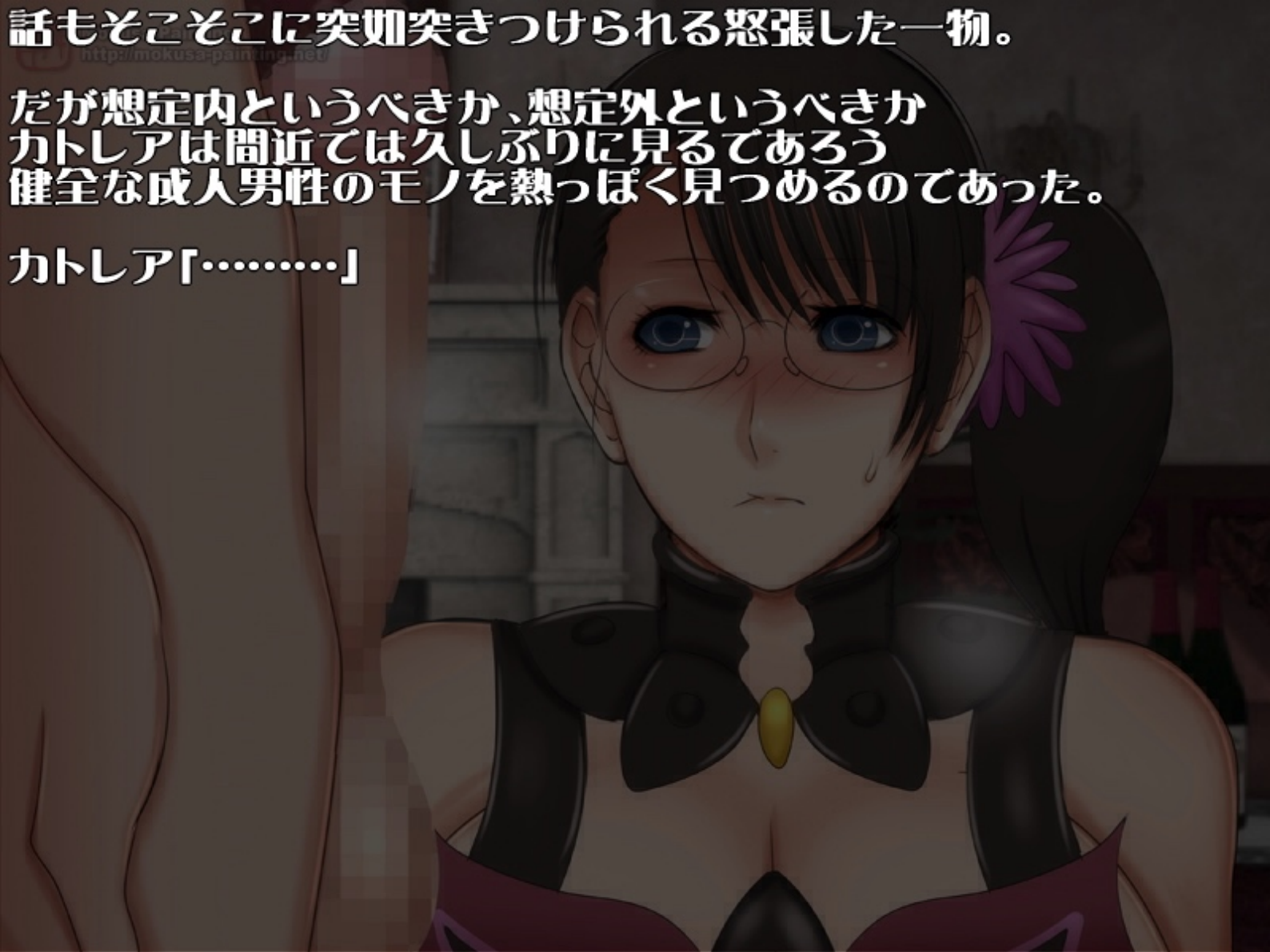


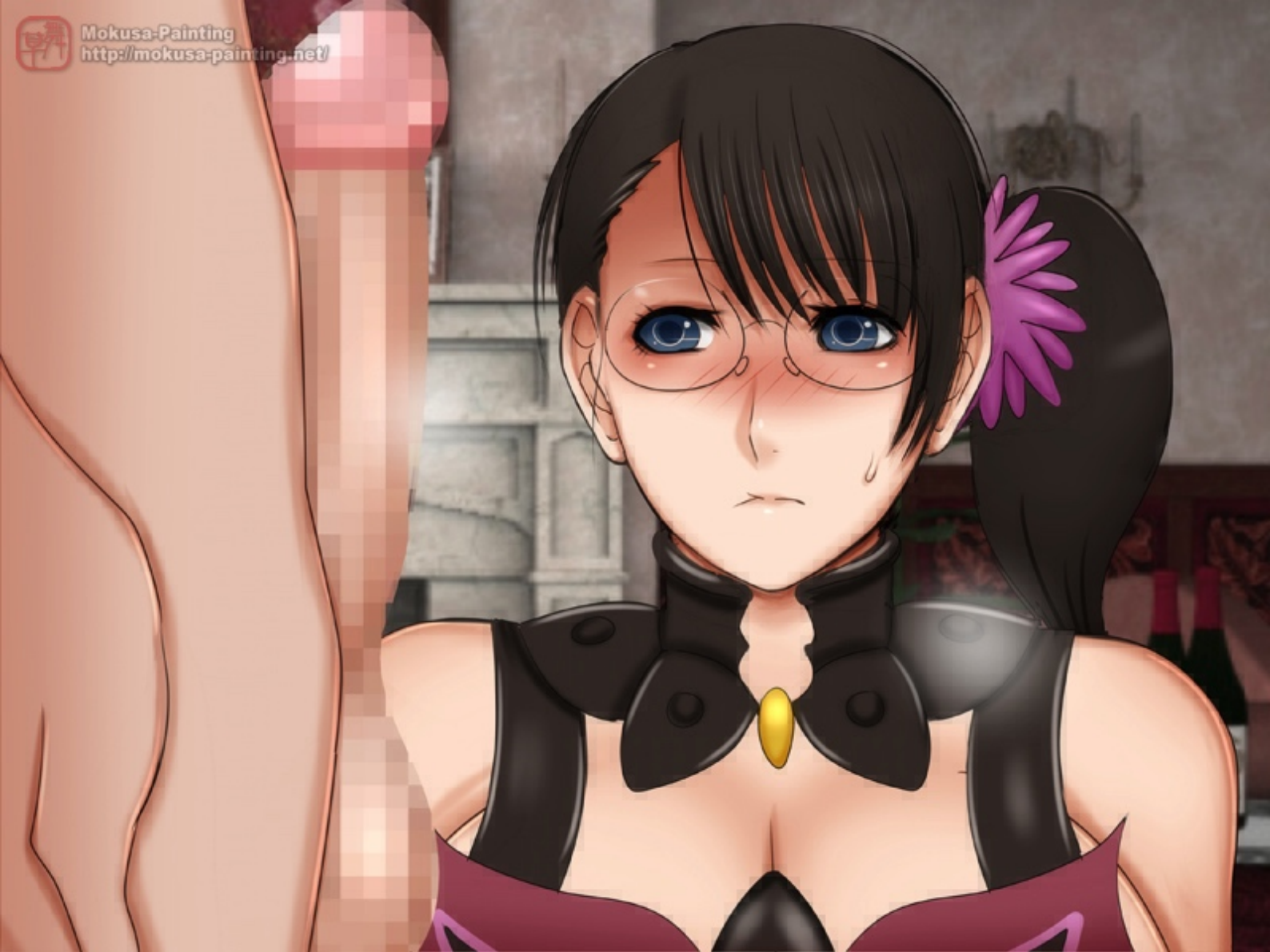


話もそこそこに突如突きつけられる怒張した一物。

だが想定内というべきか、想定外というべきか
カトシアは間近では久しぶりに見るであろう
健全な成人男性のモノを熱っぽく見つめるのであった。

カトシア「……………」







もはや、こうなってくるとどうしようもない。
例によって男の家には
多種多様な香草類が焚かれており、
普段であればむせるような匂いも心地よい。

ある意味で阿片窟とも言えるようなこの場所で
カトシアは快楽を貪り続けるのであった。





Mokusa-Painting
<http://mokusa-painting.net/>





そして、また二月ほどが過ぎた。

はじめは失踪した夫に対する罪の意識、
良識や世間体についてのとまどいも強く
どこか控えめであったカトシア。

だが、信じて待ちたい気持ちもあれど、

「残されたものは残されたもの同士で
また生きていかなければ。」

という男の言葉にも徐々に流される形で
カトシアもまた開花していくように見えた。



Mokusa-Painting
<http://mokusa-painting.net/>



これだけ頻繁に密会を重ねていけば、流石に息子のラナとも接点を持たざるを得ない。

ただ、男もそのあたりはしっかりしたもので、「親切なおじさん」という印象を与えていた。というか、実際それほどの悪人でもなく(?)、ある意味では自然なことかもしれなかった。

カトシア「ラナ！ どうしてここに！？」

ラナ「おじさんに連れてきてもらったんだ。お母さんはお父さんがいなくなってからひとりて寂しい思いをしているから、みんなて喜ばせてあげないって」

カトシア「フ、ファンブル！ あなた」

ファンブル「そのとおり。私は君たちを家族と思っているし、隠したりしたくもないから、ラナ君にも全部話したんだ」

ラナ「お母さん、こうすればいいの！？」

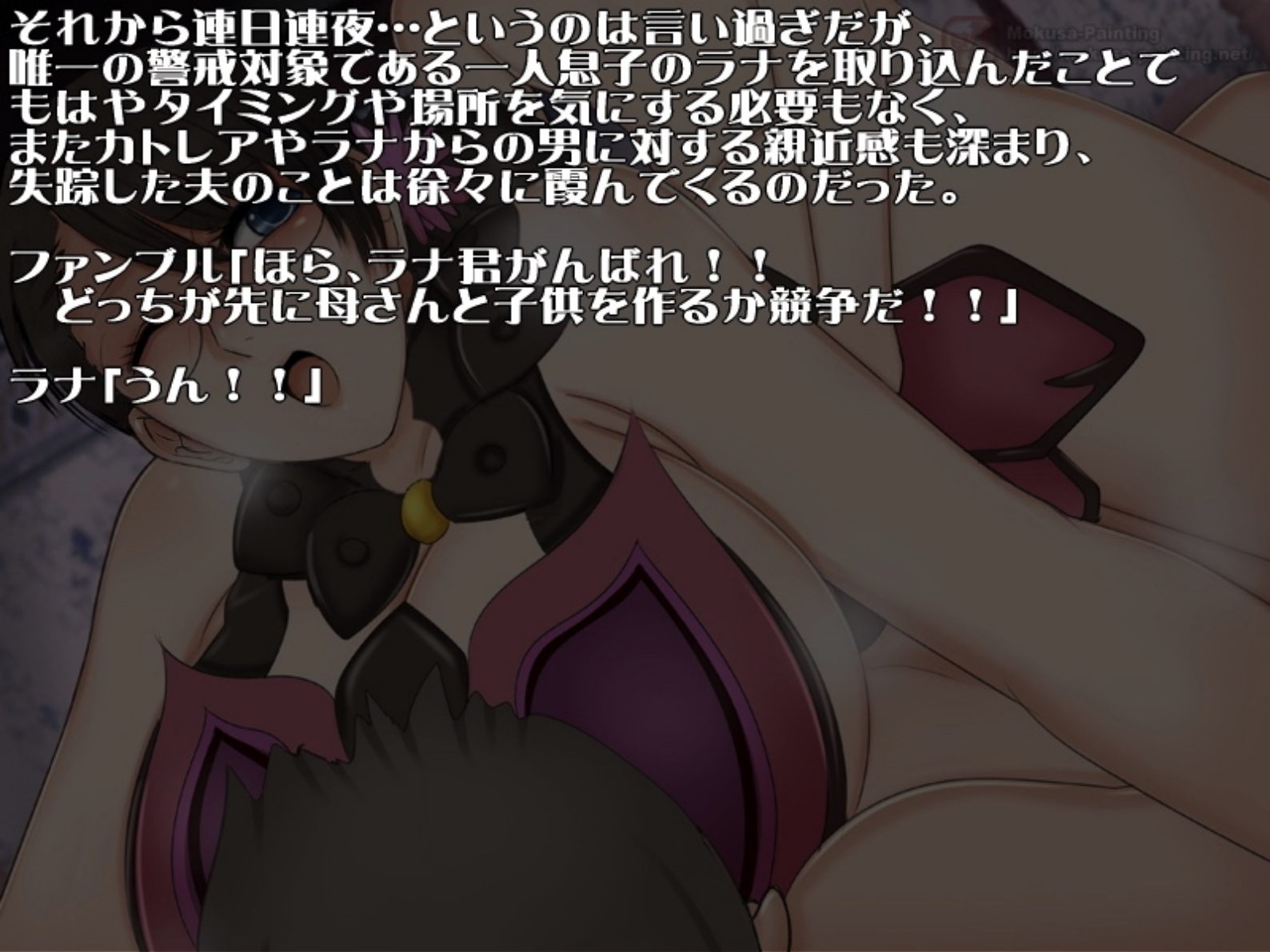
カトシア「あ！ ちょっと、ラナっ！！」



それから連日連夜…というのは言い過ぎだが、
唯一の警戒対象である一人息子のラナを取り込んだことでもはやタイミングや場所を気にする必要もなく、
またカトシアやラナからの男に対する親近感も深まり、
失踪した夫のことは徐々に覆ってくるのだった。

ファンブル「ほら、ラナ君がんばれ！！
どっちが先に母さんと子供を作るか競争だ！！」

ラナ「うん！！」





そして、さらに月日が過ぎた。
もう実質的には完全な家族と化している三人だったが、
ちょっとした変化が訪れた。

どうやらカトシアが子供を身ごもったらしい。

ラナ「男の子かな？それとも女の子かな」

ファンブル「ああ。それ以前に、どっちの子かな(笑)
まあ、どっちでも私には子供で、ラナにはきょうだいだ」

カトシア「うふふ、そういうことになるわね。
失踪したあの人には悪いけど…」

ファンブル「それは今の時点では仕方ないよ。
これから君の元旦那や私の元妻が戻ってきたなら、
それこそ皆で仲良く毎晩毎晩やればいい話さ。
大家族ばんざいって奴だ。
だから、元気な赤ちゃんを生まないとね」

カトシア「ええ、そうね、あ・な・た」

































Mokusa-Painting
<http://mokusa-painting.net/>





